

幸福な社会実現のために、今こそ、認め、支え合う学級づくりへ

京生研基調委員会

1 はじめに

昨年に総選挙が行われ、自公過半数割れという結果となり、国民が現行の政治に変わる新しい体制を模索する段階に入った。日本の政治は、大きな激動の渦中にある。しかし、自公政権は裏金問題に無反省、企業献金にしがみつき、財界・大企業中心、日米軍事同盟絶対という問題には触れず、さらなる大軍拡などを進めており、国民との矛盾を一層深めている。さらに、物価の上昇と変わらない賃金で国民の生活はますます窮地に追い込まれている。また、教育の分野では、給特法の見直しが行われようとしており、「定額働かせ放題」と言われるように、わずかな調整手当を増やすだけで、残業代未払いの仕組みは残されようとしている。この基調では、今日の社会情勢、教育情勢をどうとらえ、学校づくり、学級づくりにどう働きかけるのかを提案したい。

2 ここ数年の社会情勢と教育情勢

(1) 社会情勢と教育情勢

新自由主義に基づく政策が始まってもう数十年たっている。新自由主義政策は、競争原理を働かせるために規制を緩和し、民営化をどんどん進めた。自由な競争に任せて社会を発展させていくというものだ。

2000年代になり、構造改革が行われて、公務員の「人員削減」と「給与カット」がなされた。そして、公共事業費の削減も行われた。政府の財政負担を減らすために、増税も行われた。民営化がどんどん進み、郵政の民営化、道路公団の民営化も行われた。大きな目玉政策として行われたのが、労働者派遣法の改正であった。規制緩和を推し進めて、派遣労働の自由化が進んだ。その流れの中で、教育基本法も改悪された。

また、アメリカのトランプ大統領の政策は「メイクアメリカ・グレートアメリカ」を掲げ、国内産業の保護や国際的な貿易協定の再交渉を中心に展開されている。法人税率を35%から21%に引き下げるなどの減税政策を実施し、企業活動を活性化させている。一方で、中国との貿易戦争を激化させ、高関税を課すことで国内産業を守る姿勢を見せている。環境政策では、パリ協定からの離脱を決定し、国内の石炭産業や製造業を保護する方針を示した。移民政策では、不法移民の取り締まりを強化し、国境壁の建設を推進した。これらの政策は国内外で賛否両論を呼び、特に国際的な協調を軽視する姿勢が批判される一方で、支持者からは強い支持を受けている。しかし、自国優先の貿易政策は、短期的な効果は出すことができて国際的な関係のことを考えると、悪影響を及ぼすことになる。日本は、実質的にアメリカの信託統治下であり、外交や防衛政策の自由が制限されている。日本国内では米兵による犯罪を日本の法律で裁けないなど、日米地位協定の不平等性も問題視されている。そのような対米従属の日本が、アメリカの戦争に利用される準備も着々と進んでいる。また、少子高齢化の影響で自衛官志願者が減少しており、人的リソースの確保が課題となっているなか、政府は人材確保のために中学校にも積極的に動き出している。自分の存在価値や安定した居場所のない子どもは、戦争に加担することで居場所を見つけていくのかもしれない。そういった動きに歯止めをかける子どもを育てていくことが求められる。

国家による教育への不当介入も大きな問題となっている。国家が教育に介入することは、憲法や教育基

本法の観点から慎重に議論されるべき問題だ。日本では、戦前の教育統制の反省から、戦後の憲法や教育基本法において「教育は不当な支配に服することなく行われるべき」と定められている。学校が国家の影響を強く受けると、教育の自由が制限され、批判的思考を育む環境が損なわれることがある。また、特定の価値観や歴史観が強調されることになる。昨年、奈良教育大学附属小学校の教員の強制出向が大きな議論を呼んだ。大学側は、教育課程が学習指導要領に照らして「不適切」と判断し、複数の教員を県内の公立小学校へ出向させる措置を取った。この介入に対して、同校の教職員だけでなく、保護者や教育関係者から批判の声が上がり、「奈良教育大学附属小を守る会」が結成され、全国から多くの教育団体が抗議声明を出した。同会は、附属小学校の教育は子どもたち一人一人の成長への願いや発達要求を受け止め、その実現のために教育課程の自主編成に取り組んでいたと主張し、国家の介入が教育の自由を損なうと懸念している。

（２）課題

新自由主義政策が進んでいくことで、大きな課題が残った。まずは、格差の拡大である。正規労働者と非正規労働者の格差が広がった。社会保障費の国民負担が増えて、増税や年金に影響を与えることになった。自己責任論が国民に植え付けられた。競争させる条件をつくれればつくほど経済はのびていくという考えであったが、努力の結果が出たらそれはそれで良しとし、うまくいかなかったらあなたの責任ですよという自己責任論を押し付けることになっていった。さらに、教育の市場化が進むことで、学校間の競争が激化し、教育の質が均等に保たれにくくなってきている。また、成果主義が強調されることで、教師や生徒に過度なプレッシャーがかかり、教育の本来の目的が損なわれることも懸念されている。アメリカでは更に事態は深刻である。新自由主義の邁進によって生まれた貧困の渦中に喘ぐ人々を煽り、彼らの熱狂をエネルギーにしたトランプ政権が復活した。グローバルな世界を否定し、排他的な政策をすすめ極端な自国内の利益を最優先する国家の存在が世界の秩序や経済を大きく揺るがしている。その波は必ず今後の日本国内の政治、経済、教育に影響を与えだすだろう。

（３）教師が追い込まれている状況

i) 過剰な業務量

教員の過剰な業務量は、日本の教育現場において深刻な問題となっている。特に、長時間労働が常態化し、精神的・身体的な負担が増加していることが指摘されている。授業準備だけでなく、事務作業や保護者対応などの業務が増え、教員の負担がさらに増している。部活動の顧問業務が教員の負担を増加させており、特に中学校では約５割の顧問が専門知識を持たないまま指導を行っている。教員志望の学生が減少し、退職者の増加に伴い、教員の確保が課題となっており、一人当たりの業務量が増加している。

また、家庭や地域社会の教育力が低下する中で、学校や教員に対する期待が高まり、授業準備以外の業務も増えている。いじめや不登校、特別支援教育の対応など、学校が取り組むべき課題が多様化し、教員の負担に拍車をかけている。

ii) 教育のサービス化

日本では保護者の「お客様意識」が強まり、学校に対する要求が増加していることが指摘されている。また、教育の市場化が進むことで、学校間の競争が激化し、教育の格差が拡大する可能性もある。受験用

のアプリやオンライン学習サービス、教師向けの授業支援システムなど教育テクノロジーが普及し、ギガスクール構想などデジタル技術を活用した教育改革が進められている。個別最適化学習や教員の業務負担軽減を目的とした AI 搭載の学習アプリやツールも導入されている。これらの取り組みにより、教育がより市場化され、サービスとして提供される傾向が強まってきている。

市場競争の影響で、学校は短期間で成果を出すことを求められ、長期的な学びや人格形成が軽視される可能性がある。そして、民間の教育サービスが拡大することで、公立学校の役割が縮小し、教育の公共性が損なわれる可能性も大いにある。

iii) 教育政策の変化

教育政策においては、デジタル化の推進、21 世紀型スキルの育成を目的に、思考力・判断力・表現力を重視した学習指導要領の改訂が行われた。AI やデータ分析を活用し、生徒一人ひとりに合った学習方法を提供する個別最適化学習が導入された。さらに、英語教育の強化や国際的な視点を持つグローバル化を目的とした教育プログラムの導入が進められている。これらの教育政策の変化は、教育改革という名の下に従来の教育方法の多様性を否定し、教員の多様性を奪うことにつながっている。

IV) 子どもの抱える困難が見えにくくなっている

包摂されることで安心し、そこから排除されることで自分は違う存在として見られてしまうことを恐れている子どもたち。包摂の外側には、もっと自由で楽しい世界があるはずなのに、それを知らないまま大人になってしまう子どもたち。教師も同じで包摂されることで安心感を得て、外の世界を知る機会がない。しかし、包摂の外側にいる子どもと関わり、その子どもをも集団の中に必要と感じた時に、その教師の枠は広がっていく。ウィズコロナで、どんどん活動が制限されていく中で、制限された中で生活することが当たり前になってきている。それは、活動面だけでなく、子どもや大人の精神面をも制限している。学習指導要領が改訂され、子どもたち一人一人に育成すべきものが「確かな学力」から、「3 つの資質・能力」へと転換された。いじめ、校内暴力、学級崩壊、保護者対応など、時代とともに様々な教育課題が山積するなかでは、問題さえ起こらずにみんなが楽しく過ごしてくれば良いということが、教師の願いになっていっている。学級集団を高めていこうという発想はそこにはない。

また、生徒指導は授業で行うという側面がうたわれていて、「主体的・対話的で深い学び」との関連が強く打ち出されている。授業改善をして「主体的・対話的で深い学び」という高度な学びを実現するためには、子どもたちの主体的で自治的な取り組みが不可欠であり、それは質の高い学級集団がなければできないことだ。本来なら「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、子どもたちが協働し、自ら問題解決していくような学級集団づくりが求められている。しかし、求められるのは授業改善ばかりで、いかに教師が「より良い授業」をつくっていくのかどうかが教師に問われている。ここで言う「より良い授業」というのは、我々が目指すどの子も取り残さない授業とは違い、一部のエリートを育成すれば良いという授業である。

このように、教師に求められているのが、「授業の在り方や子どもの資質能力の向上」や「問題を起こさせないような生徒指導」になっているために、子どもの声を聴くことをせず、子どもの自立や集団の高まりを目指そうとしていないから、子どもの抱える困難が見えにくくなっているのではないだろうか。そういう空気は職員室にもつくりだされている。

3 めざす基本姿勢

この間の京都のレポートを読んでいると、実践家の多くは、課題を抱えた子どもとの個人指導を優先させて、指導被指導の関係をいち早く作りだしていこうとしている。しかし、集団を民主化させるという点において、その実践が、個人指導の枠から広がっていかずに、個人指導を追いつける1年間になっている実践も少なくない。課題を抱えた子どもを、分析して、その子どもの課題をともに乗り越えていこうとする実践が必要になってくるときに、クラス集団の民主的な風土が必要である。もちろん、課題を抱えた子どもとの関係がうまくいくことが何よりも大切なことではあるが、それが上手くいったとしても、集団との発展に絡みあってこなければ、集団づくりはすすんでいかない。かといって、先ほど述べたように、自己責任論が強くなり、課題を抱えた子どもの生きづらさを理解する子ども、保護者、社会にはなっていない。そういった狭間で苦悩してクラス集団の発展につながっていかない実践が少なくない。

しかし、集団から最も抑圧された側から集団の矛盾を問い直していくことは大切であり、そこからしか集団の民主化はありえない。京生研の基調では、最も大きな課題を抱えた子どもを実践の軸としてきた。課題を抱えた子どもとの関係をつくっていくのと同時に、クラスの民主化を行っていく指導を同時並行に行っていくことが、今こそ、求められている。不登校の子どもに登校するように促しても、クラスが民主的になっていなかったり、その子のつながりの居場所がなかったり、クラスにその子の安心基地がなかったりすれば、登校する気にはならないだろう。そういう意味で、クラスのみんなが安心できる空間をつくっていくことが集団づくりの第一歩ではないだろうか。

(1) トラブルをどうとらえるのか

i) トラブルにはわけがある

トラブルを起こす子どもは、過去に傷つきを抱えているだろうという推測をもつことから実践をスタートさせることを京生研では重要視してきた。そして、その子が抱える苦悩は、多かれ少なかれ、その集団が抱えさせられてきた苦悩につながっていると指摘してきた。子どもたちは、荒れるという形で、学校に対して、異議申し立てを行ってきた。しかし、今、子どもたちは集団で荒れるという方法やつながりを持てなくなった。その中で、荒れや集団に適応できない子どもは、集団にとって邪魔な存在であり、必要のない存在として、教師も子どもも見なくなった。

しかし、子どもの異議申し立て行動の背景にある苦悩を捉えることが教師にとっては、1番大事なことでないだろうか。私たちは、子どもが過去にどのような傷つきや、今、どんなストレスを抱えているのかという視点で子どもの異議申し立て行動を受け止めていかなければならない。

そして次に、その子が受けてきた傷を再び負わないように、私たちは、配慮していかないといけない。その配慮により、私たちと子どもは、出会い直しをしていく。ときには、その配慮が子どもに届かずに気づかないまま過ぎていくこともある。これほどしているのに、なんでわかってくれないのかと思う時もある。でも、それでも私たちは配慮をし続けなければならない。それは、子どもの傷つきを癒すためであり、それをケアと呼ぶのだろうか。

教師から子どもへの配慮は、クラス集団への配慮にもつながっていく。クラスの子どもたちは、教師の子どもに対する言動を鋭い眼差しで見ている。とくに、それがうまくいかいかないかで、クラスの子どもたちの教師への信頼に大きく関わってくる。だから、教師はその子どもへの配慮を神経を研ぎ澄まして行っていく必要がある。

それがうまくいくと、教師への信頼も勝ち得ることができるし、クラスの子どもからのK（最も大きな課題を抱えた子ども）への見方をも変えて行くことになる。そういった意味でも、Kへの配慮は、クラスへの配慮となる大事なものである。

もう一つは、子どもが声をあげられないということである。新自由主義による抑圧により、子どもたちは声を封じ込められてしまっている。そこから、もれ出す拒否行動に対して、教師は抑圧的に封じ込めようとしている。しかし、本当に大事なのは、拒否行動の裏にあるその子の願いを読み取ろうとすることである。さらに、「本当にこれでいいの」と問いかけ、声を上げやすい状況を作っていくことである。そういう教師の行為は、教師はあなたと共にあるよというメッセージを子どもに与え、子どもが自己責任として1人で悩まなくてよいことを補償していくことになる。

ii) 困った子は困っている子

「いやだ。やりたくない」をどう読み取るのか、初めてやることや難しそうなことには不安感が強い。そういう子には、失敗しても叱られない、否定されない経験と応援してくれる他者の存在があって安心感が培われる。「困った子は困っている子」という考え方は、教育や子育ての現場でよく語られる重要な視点だ。子どもが問題行動を起こすとき、それは単なる「困った行動」ではなく、その子自身が何かに困っているサインであることが多い。

例えば、じっとしていられない子どもは、環境に適応するのが難しいのかもしれない。急にパニックになる子どもは、不安や恐怖を抱えている可能性がある。こうした行動の背景を理解し、適切な支援をすることで、子どもたちが安心して成長できる環境を作ることができる。

iii) 否定の中に肯定を見る

「否定の中に肯定を見る」という考え方は、子どもの行動や取組をふり返るときにとっても大切な視点である。困難や逆境の中にも、成長のチャンスや新たな可能性があるということを示唆している。ネガティブな出来事を失敗としてではなく、何か学びや価値を見出せるものとして捉えられたら、より前向きに分析していくことができる。この視点は、先ほどのトラブルをどう捉えるかということについて関わってくる。荒れや暴言で自己を表出してしまったけれど、その子の本当の願いは何かを見つけていく、もしくはつくりだしていく作業である。こういった分析は、トラブル指導において子どもを悪者にしないために、とても大切だ。

iv) 分からせようという指導から分かろうとする指導へ

トラブルがあるとその後、指導する。その時に、教師は理屈を並べて、その子の言動がいかに悪いのか、いかにまちがっているのかと判断し、教師が正しいと考える事を分からせようとしがちである。そのような指導の結果、子どもは、“自分のことをわかってもらっていない”と思ったり、ともすると反抗心をもってしまったりすることもある。こういったことが続くと、教師と子どもとの信頼関係はつくれないうし、教師に対して不信感を持ち始める可能性も出てくる。では、トラブルが起きた時、どんな指導が大切なのか？それは、その子の思いを分かろうとする指導である。教師が子どもを分かろうとしたときに、教師の言葉かけはその子への配慮を伴い、温かいものになっていく。その繰り返しで、教師と子どもとの間に信頼関係ができる。子どもは、自分が信頼されていると実感したとき、その信頼に応えようとするのである。

（２）分析とは

i) 子どもの見えない部分

トラブルが起きた時の指導は、もちろん大切であるが、指導だけではその子の自立や成長を促していくことは難しい。なぜなら、その子が抱えさせられている背景はあまりにも大きいからである。水に浮いている氷を思い浮かべて欲しい。水面に浮いている部分はほんの一部であるが、水面下には大部分の氷が沈んでいる。表出する問題行動が水面から浮いている部分だとすれば、その子が抱える課題は水面下に多く存在することになる。それは学校で過ごしているその子の姿だけではなかなか見えない部分でもある。我々がやってしまいがちな指導は、水面に浮いている氷の一部を上からたたくという指導をして、いったん水の中に沈めてしまうという指導である。しかし、いったん水面下に沈んだ氷は、上から押さえつけられた反動で再び上昇してくる。それは時として、以前よりも激しく上昇してくる。

ではどうすればいいのだろうか？それは、水面下に沈んでいる様々な問題を分析して、それをゆっくりゆっくりと溶かしていくことである。つまり、方針をもって指導や取組を行い、課題を一つ一つ乗り越えていくことである。水面下に沈んでいる問題を分析するために、その子がどういう環境で育てられてきたのか、そして、どんな困りを抱えているのか、また、それぞれの発達段階で必要なちからが育まれてきたかなどを知ることである。

ii) 発達課題について知る

子どもの発達においてまず問題になるのが、「基本的信頼感」である。「基本的信頼感」とは「世界や人類に対する漠然とした信頼感」のことで「人間っていいな。世界はすてきだな。生まれてきてよかったな」となんとなく思えるということである。これは無償の愛を受けること、他者に優しく世話を受けることで育つといわれ、子どもの生育史のなかで最も集中的に他者の世話を受ける乳幼児期の課題である。近年多発する不登校や自殺などの遠因となっているのがこの「基本的信頼感」の欠如だともいわれているが、「早期教育」の名のもとに乳幼児期から「集団肯定・自己変革」の教育ばかり受けていたのでは「基本的信頼感」は育たない。「基本的信頼感」の少ない子どもは、自分の価値を見いだせないので、自他を破壊する行動に躊躇せず、他者に対する不安感が強いので「他者を支配下に置きたい」という欲求を強くもつ。

この「基本的信頼感」を取り戻すためには、「無償の愛を受けること」「ありのままの自分を丸ごと受け入れてもらうこと」が必要である。条件付きの愛情では育っていかない。「基本的信頼感」が充分育っていない子どもはそれを取り戻す行動を開始すると、他者を攻撃したり、指導するものに嫌がらせ的な行動をとったりすることが多い。これは「どこまで自分を受け止めてくれるか」を試す行動である。そのために、指導する際には、その子の未熟な行動をおおらかに受け止めてくれる集団をつくっていくことが求められる。

（３）脱競争

競争原理とは、経済学や社会学において、個々の主体が限られた資源や機会を求めて競争することで、効率性や革新を促進する原則を指す。市場経済の中では、企業や個人が競争することで、より良い商品やサービスが提供され、価格が下がり、全体的な社会の福祉が向上することが期待される。競争原理が与えるマイナスの影響は、格差の拡大、過度なプレッシャーとストレス、不安が大きくなる、失敗を恐れる気

持ちが強まる、協力が少なくなり、一人一人が自分の責任を強く感じてしまうことである。

4 実践を通して

(1) 脱自己責任論

i) 真のリーダー層が寄り添うべき他者とはつまり K (課題を抱えた子ども) のこと

K の視点から集団の在り方を考えていくということは競争によって子どもたちをランク付けしていく学校をなくすために、非常に大切な視点である。荒れる子に得意なこと、活躍できること、ほめること、認められることを見つけて色々取り組んでいく。これは、大事である。ただ、指導をクラスに開いて、「○○さんのしんどさ(気持ち)は、わかる」という共感だけで終わってしまっただけではいけない。「でも、それを乗り越えていこう」という共闘(取組)が必要になってくる。そして、その取組の中で、その子ができないときに、その子に自分の課題を向き合わせて、その子の課題を乗り越えさせようとする葛藤を起こさせる指導が必要になる。仲間に支えられているという安心感があると、自分の課題に向き合うエネルギーがでてくる。また、他の子どもも、そういう風にしてくれる先生は、自分も見捨てずに安心を与えてくれると感じる。

近畿地区学校での秦レポートは、1 学期はアンナという不登校傾向の子どもに寄り添い実践を進めている。本人の困りに寄り添い、クラスにアンナの困りを理解する話し合いを設けている。そして、アンナの困りを受け止めて、アンナが出来るだけ困らないような取組を行った。子どもたちは、困りを抱える子どもに対して寄り添っていくことがクラスの発展につながっていくという体験をした。

その体験が、2 学期にリコが不登校になった時に生かされた。リコの学校に行きにくい気持ちにクラス集団は寄り添い、そして、黒板やライン、手紙での励まし、さらに、別室で給食を食べるという取組に発展していった。こういった取組の積み重ねによって、クラスの子どもたちも、このクラスでは自分たちの困りを受け止めてくれると感じたに違いない。

また、リコは、放課後に仲間と共に、机の上を跳び回って自分の抱えるストレスを出す場面がある。今までは出すことのできなかった自分の思いを仲間と共にいることで、初めて出せたことになる。家では、母の前でよく気が付き、文句の言わない子であったリコが、仲間と共に自身の抱える本音を出すことができた。そこには、リコの思いに寄り添った取組を行い、その結果、仲間ができたからだ。

ii) 支配的公共圏と対抗的公共圏

当初はギャルグループを中心とした支配的公共圏がクラスの空気をつくっていたが、それに対してリコに寄り添う対抗的公共圏ができ始めた。支配的公共圏とは、社会の主流となる価値観や権力構造によって形成される公共の場を指す。政府や大企業、主要メディアなどが主導する情報発信や議論の場であり、多くの場合、既存の社会秩序を維持する役割を果たす。それに対して対抗的公共圏とは、支配的公共圏に対抗する形で生まれる公共の場であり、社会の中で抑圧されている人々やマイノリティが、自らの声を発信し、議論を行うための空間である。例えば、移住労働者の権利を求める運動や、ジェンダーや民族の問題を扱う市民団体の活動などが対抗的公共圏の一例である。特に民主主義社会において重要な役割を果たし、支配的公共圏が主流の価値観を維持する一方で、対抗的公共圏は社会の変革を促す力を持っている。

自分たちの困りを受け止めてくれる雰囲気が出来上がってきたときに、アンナやリコなど困っている子どもが優しくされるという支配的公共圏ができ始める。この時、女子グループでのラインをめぐるトラブル

ルが顕在化していく。これは、アンナやリコへのクラスを取組を見ていた女子グループたちも自分たちの困りを受け止めてもらえると無自覚に感じたのかもしれない。もしくは、秦に対する『もっと自分たちの困りを受け止めて欲しい』というメッセージだったのかもしれない。

そこから、秦は連日、女子のトラブル指導に関わっていくことになる。出来るだけ授業の時間は確保して、女子同士の話し合いの場を積極的に持った。そこでは、お互いの意見を言いあい、相手の気持ちを理解するということを最優先して取り組んだ。きちんと解決した話し合いは少なかった。でも、彼女たちが求めていたのは、答えじゃなくて自分たちの気持ちを伝えて、受け止めてもらう事だったのではないだろうか。

リコに寄りそう雰囲気に対して、上辺だけのやさしさだと感じたギャルグループは、自分たちの仲間における本当のやさしさや友だち関係に対して、異議を唱えるようになってくる。それは、ライングループの人間関係のトラブルという形で表れてきた。様々な家庭環境での生きづらさを抱えたギャルグループたちが、お互いの顔をうかがいながら、友だちに合わせて行動するようになる。もの隠しという事件を起こすことによって、本当のやさしさは無自覚に求める場面も出てくる。そこには、自分の困りに本当に寄り添ってくれる集団と教師なのかを確かめたいという無自覚な意図をくみ取ることができる。

秦は、そういった対抗的公共圏のギャルグループの異議申し立てに対して、いくつかの方針をもって取り組むことになる。それは、トラブルの事実を整理しながら、ギャルグループの持ちちからを公的な場面で肯定的な方向に発揮しようとするものであった。折り紙の取組やダンスの取組、クリスマス会の実行委員会へと発展していく。その取組の繰り返しの中で、しだいにギャルグループが教室の空気をつくるようになってきた。

そして、お誕生日会で初めてのダンス発表を行うことになる。ところが、この発表に対して、男子は、好意的に受け入れていない。拍手をして発表を受け入れるものの、ダンス発表への反応は薄く、盛り上がっていなかった。つまり、新たに、ギャルグループに対する男子の対抗的公共圏が生まれることになる。

そのことに、危機感を持った秦は、発表するギャルグループとそれを見る男子のグループも互いに盛り上がって一つになれる方法を考える。そこで、ダンスに対して好意的な印象を持つメンバーを集めて、もう一度、発表会を行い、そこで一つになれるように画策し始める。その時は、見ている側も一緒に盛り上がれるように秦はコールを準備し、フライヤーをつくって教室に貼り、うちわをリーダー層と一緒に作った。さらに、ペンライトを購入して盛り上がる準備をした。クラスでは、サプライズでコールの練習をして男子も本番に臨んだ。当日は、クラスが一体となり盛り上がる事ができた。

学期末までの日数が少なかったために、秦は焦りからか、教師主導で取組を進めてしまった。本当ならリーダーたちとじっくり話したかったし、男子の思いも引き出していきたかった。このことは課題として今後、生かしていきたい。

iii) 欲しいのは答えじゃない

本当の優しさを体現するためには、時間がかかる。3学期の女子グループの話し合いの中で次のような形で表れている。3学期になり、女子グループがアイドルグループをつくり、メンバーの名前とメンバーカラーを決めて、休み時間にはダンス練習をして発表する準備を行っていた。1回目の発表では、衣装を揃えてダンスを発表した。その後の話し合いで、メンバーの一人が『私は無理してみんなに合わせていた。それがしんどかった。友だちのままだいたいけど、アイドルグループは抜きたい』と言った。それを聞いて

いたメンバーは涙を流しながら、そのことを受け止めた。このように、自分の困りを言い合い、それを受け止め合えることが大切なのではないだろうか。欲しいのは答えじゃなくて、自分の困りを言える安心感できる仲間である。話し合いにおいて、たとえ答えが出たとしても、それを乗り越える方法も一緒に考えていかなければいけない。子どもの課題を明確にしてそれを突き付けるだけでは、子どもに傷を負わしかねない。それと同時に、その子どもの課題と一緒に乗り越えていく教師であるということと、そのための方法を一緒に考えていく仲間がクラスにいることも大切である。本当に欲しいのは、安心できる仲間なのである。

（５）集団の発展のために（バタフライエフェクト）

アンナの困りを受け止めるということは、新自由主義がもたらした自己責任論を打ち崩していく取り組みである。一人の困りをみんなで理解して、支え合っていくこと。これは、学校の背景にある社会の問題に対抗していく大切な視点である。リコの場合も同じである。リコは、ある日の放課後に、３人の仲間に自分の困りを打ち明ける。それは、リコが自分のことを語れる仲間とその仲間への安心感を持つことができた結果である。

また、閉鎖的であった女子グループは、クリスマス会の実行委員という公的な活動の中心になって取り組むことで、開放的なグループになっていく。最終的には、アイドルグループにアンナが加わって活動していくことになる。これも、最初の一步は、一人の困りに寄り添うということから始まっている。一人の問題をみんなで考える結果、小さな変化が起こっていき、大きな変化を起こしていった。私たちの行っている集団づくりは、まさに、バタフライエフェクトである。こういった小さい行動の積み重ねがクラス集団の発展という大きな結果につながっていった。

５ おわりに

このようにクラスを民主化して、安心安全な場所をつくっていくこと。それと同時に、課題を抱えた子どもとの関係をつくっていくことが必要になってくる。今、多様性の時代である。家庭環境や経済状況の違い、そして、性別や個性、発達の問題など様々な課題を抱える子どもがいる。多様性を尊重するあまり、ともすれば画一的な指導になってしまいがちである。そうならないために、最も困難な生きづらさを抱える子どもが安心して暮らせる集団、そして、つながりのある居場所をつくっていくことは、私たちが絶対にぶれてはいけないことだ。

最も抑圧された子どもから社会を見ていくことやその子を実践の軸にしていくこと。これらは一人の子どもを変えていくこと、クラス全体を変えていくこと、親を変えていくこと、社会を変えていくことにつながっている。先ほど述べたバタフライエフェクトである。私たちは確信をもって実践していきたい。また、これらは京生研の財産であり、伝統であり、普遍であり、受け継いでいくべきものである。

（文責 岩本訓典）

1 秦和範「みんなが安心して過ごせるクラスを目指して」、京都府生活指導研究会編『Kの世界』2025年夏号